



👁️👁️ みどころ

人気TVシリーズ“家政婦は見た!”では市原悦子が大奮闘していたが、ジャンヌ・モロー扮する“美人の小間使”がブルジョアジーの豪華なお屋敷で見たものとは?

『死刑台のエレベータ』(58年)でシリアスな演技が光っていたジャンヌ・モローが、本作では個性豊かな(?)多くのお屋敷の人々に揉まれながらたくましく成長していく姿を見せるので、それに注目!

隣地との紛争案件はどうでもいいが、死亡した少女の“事件性”は重大。あえてパリから田舎町のメイドを希望してきたヒロインだが、言い寄ってくる多くの男たちの選択を含め、いかなる人生の選択を?

フランスの美人女優レア・セドゥによる2015年の『小間使の日記(あるメイドの密かな欲望)』も悪くはないが、やはり、ジャンヌ・モローの63年版は必見!

■□■ジャンヌ・モローの魅力をあらためて!■□■

「ジャンヌ・モローとカトリーヌ・ドヌーヴ、あなたはどちらが好き?’ そう聞かれたら、日本人の10人に9人はカトリーヌ・ドヌーヴと答えるだろう。しかし、『死刑台のエレベータ』(57年)の面白さと、今作における何とも言えない魅力的なジャンヌ・モローをしっかりと確認すれば、少しは気が変わるかも。さらに、悪女性的なイメージが強いジャンヌ・モローだが、本作のような可愛くて、素直な(?)、小間使役に扮すると、その魅力は・・・?

本作冒頭は、大きなトランクを持って田舎のお屋敷に小間使としてやってきたセレスティーナ(ジャンヌ・モロー)が登場し、さっそく仕事に就いたが、彼女はなぜパリからこんな田舎町にやってきたの?そして、大きなお屋敷に住む一家の個性的な面々は?

■□■フランスにおけるブルジョアジーの誕生は？■□■

ブルジョアジーvs プロレタリアートの"階級対立"は『資本論』等でマルクスとエンゲルスが唱えた学説。しかし、右派と左派の対立が激化するフランスでは既にブルジョアジーが誕生していたようで、それが本作に見るモンティユ家だ。他方、明治維新を"主導"した日本の若者たちは、幕府派か薩長派かは別として優秀な人材が多かったが、家の実権を握る妻と性的欲求不満を狩猟で紛らわしている夫、さらには同居している妻の父親など、モンティユ家の“支配層”は概ねその人格に欠陥があるようだ。

したがって、その下で働いている下男や小間使いも概ねダメ・・・？初日から、そんな“腐ったフランス社会”の縮図のようなモンティユ家の人間関係の中に入ってしまったセレスティヌは・・・？

■□■原作は1900年出版の小説。そのテーマに注目！■□■

本作の原作になったのは、フランスのオクターヴ・ミルボーが1900年に出版した同名小説。小間使を主人公にした同小説のテーマは、奴隷制度の現代的な形態である召使制度を、ブルジョワジー社会のもっとも度し難い卑劣さを象徴する制度として糾弾すること。そのため、そこには「奴隷制度はもう存在しないといわれる。それは真つ赤な嘘だ！それに召使いが奴隷でないなら、いったい何だろう？道義的卑劣、余儀なき腐敗、憎悪を生む反抗について、奴隷制度のともなう一切を有するのだから、事実上奴隷だ」と書かれているそうだから、すごい。

ジャンヌ・モローが演じる美人小間使はコケティッシュで魅力的だから、そんな深遠なテーマには気づきにくい、ストーリーが進んでいくにしたがって、なるほど、なるほど・・・。小間使がご主人様の気まぐれによってたらい回しにされていく姿がありありと・・・。

■□■小間使への色目は？この小間使は何を見た？■□■

美人の小間使がお屋敷にやってくれば、男たちはその女に“色目”を使うにきまっている。『家政婦は見た！』で市原悦子が演じた家政婦はお世辞にも美人とはいえなかったから、ご主人様はもとより、家政婦仲間からも色目を使われることはなかった。しかし、セレスティヌは若く美しいから、ご主人様はもとより、下男たちからも好色の目が注がれるのは当然だ。本作のストーリーはそんな予想通りの展開になっていくが、意外にもセレスティヌは時にはピシヤリと、時には懇懇にそれを切り抜けているから立派なものだ。

他方、セレスティヌはいつも先輩の下男や小間使いたちと一緒に食事をしていたが、そこに見る下級階層同士の人間関係もややこしい。とりわけ、いつも無口で何を考えているのかサッパリ分からない下男のジョセフ（ジョルジュ・ジュレ）の存在が気になるが、ひょっとして、この下男とセレスティヌとの間に恋物語が生まれるの？そんな興味もないではないが、それ以上の興味は「家政婦は見た！」ならぬ「小間使セレスティヌは何を見た！」だ。そんなテーマの展開は後半からだから、そこにしっかり注目を！

■□■あの時代のブルジョアジーにも隣地との境界争いが！■□■

本作で面白いのは、あんなに広い土地を持っていても、なお隣人との土地の境界を巡る紛争があること。具体的には、「木の枝が俺の土地に落ちている」というアピールからの紛争になるわけだが、よく見ていると、そこには土地の境界問題だけではなく、モンテユ家と隣地の所有者である元軍人のモージェ（ダニエル・イヴェルネル）双方の価値観の対立が根深くあることがわかるので、それをしっかり探求したい。

そんな紛争（？）の中でセレスティーナがモージェと仲良くなっていったから、こりゃ一歩乱起りそう…？

■□■テーマは何と殺人事件！被害者は？■□■

そう思っていると、モンテユ家とモージェ家との相隣紛争は実はサブストーリーで、メインストーリーはセレスティーナが仲良くしていた同僚の少女の“殺人事件”という思ひもかけない展開になっていく。

観客にはこの犯人がモンテユ家の下男のジョセフであることが示されるが、セレスティーナはもとより、モンテユ家の人々も警察も犯人は分からないまま。したがって、本作後半のストーリーはどうしてもその犯人追及劇になっていく。しかし、なぜかセレスティーナはあの無口なジョセフが犯人と決めつけていたらしい。そのため、その決定的な証拠を求めてセレスティーナは奮闘していたが、それをジョセフに発見されたから最悪！さあ、事態は如何に展開していくの？

■□■小間使の犯人捜しは？■□■

そんな風に本作の面白さはどんどん広がっていくが、『小間使の日記』と題された本作は後半からクライマックスにかけてセレスティーナの小間使いとしての機転の良さが発揮されていくので、それに注目！さあ、ジョセフが殺人犯であることの証拠固めをしようとしたところをジョセフに見つかってしまったセレスティーナの、事態の切り抜け方は？

それには“色仕掛け”が一番だが、なるほど、なるほど……。一方で、自らの肉体を駆使したそんな“細工”をしっかりと固めながら、セレスティーナは他方で警察に連絡。なるほど、これならジョセフの逮捕は間違いなし！？

■□■こりゃ玉の輿？意外な結末にビックリ！■□■

そう思ったが、いやいや、ルイス・ブニュエル監督の“ひねり”は徹底している。本作終盤には、なんとセレスティーナは隣家のモージェから求婚を受けることになっていくので、それにも注目！

こりゃ、小間使いのセレスティーナにとって、とてつもなく魅力的な“玉の輿”だが、さて、セレスティーナの選択は？そして、本作ラストは如何なる展開に？それはあなた自身の目でしっかりと！

2022（令和4）年2月22日記